

青春の駅

初めて借りたアパートは京王井ノ頭線の三鷹台という駅にあった。

その頃、私はまだ十九歳で、家出同然に茨城の田舎を飛び出して来たアホ娘であった。けつして謙遜ではなくほんとうにアホで、清く、貧しく、美しくはなく、頭の中は男子のことで一杯だった。自意識過剰のくせに自信がなく、不安と希望を行ったり来たり。それが若さだと言われればそれまでだが、思い起こせば失敗ばかりの恥の多い日々を送っていた。

吉祥寺のレストランでアルバイトしながらのフリーター暮らし。時代は右肩上がりで先行きの不安はなかった。なんとかなるだろうと思わせる時代風潮。社会はバブルに向かって突っ走っていたのだ。

東京での毎日は刺激の連続だった。ディスコでナンパされたり、大学生たちと映画を創ったり、劇団に参加したり。絵に描いたような青春そのものだった。家賃は二万二千元。月収は八万ちよつとで、よく生きていたなと思う。よほど友達にたかっていたのだろう。

その頃に片思いをしていた早稲田の学生は、小田急線の経堂に住んでいた。情けないような片思いでいつまでたっても恋人未満。それでも、一緒に歩いているだけで幸せだった。彼はもともと京王井ノ頭線の富士見ヶ丘に住んでいて、バイト先で知り合ったのだ。下宿の大家と喧嘩したと言っ引越してから会えなくなり、私はとても悲しかった。いまから三十年以上も昔の話だから、もちろん携



イラスト・岡林玲生

帯電話などない。四畳半一間のアパートに住み、バイト代で食いつなぐその日暮らしの私は電話を持っていなかった。あの頃、電話は高級品だったのだ。部屋のドアに小さな伝言板をかけておく。遊びに来た友達は私が留守だとそこに伝言を残す。

ある日、バイトから戻って見ると、片思いの男子からの伝言が書かれていた。せっかく来てくれたのに、会えなかったなんて残念。私は猛烈に恋しくなつて、住所だけを頼りに彼の下宿を訪ねてみることを決意した。小田急線というのは確か新宿から出ていたよ………と思い、電車を乗り継ぎ経堂の駅に到着し、交番に住所を告げて道順を教えてもらい、やつとこき住所のアパートにたどり着く。い

文・田口ランディ
RANDY TAGUCHI

東京生まれ。2000年長編小説「コンセント」でデビュー。その後「アンテナ」「モザイク」を発表。初期の長編は三部作と呼ばれ、海外でも高い評価を得ている。01年「できればムカつかずに生きたい」で第一回婦人公論文芸賞受賞。小説に「キュア」「被爆のマリア」「蛇と月と蛙」、エッセイに「パピヨン」「生きなおすのもってこいの日」など著書多数。近著に長編小説「マアジナル」（角川出版）、ノンフィクション「アルカシカ」（角川学芸出版）がある。

まの男女なら携帯電話や携帯メールであらかじめ確認をとるのだからうが、昔の恋は行き当たりばったりだ。ドアをノックし、奥から「はい」と声が返った時はうれしかった。ああいう感動も、会えなかった時の淋しさも、携帯があるばかりに体験できないのかと思うと、今の若者は気の毒な気がする。ただ会えた、というそれだけで興奮した。そういえば最近駅伝の伝言板も消えてしまった。昔はこの駅にも伝言板があり「来ないから、先に行くー」などと書かれていたものだ。いまでも、小田急線と聞いただけでなんだかどきどきする。あの時、確かに青い恋をしていたなあと思う。もしかしてかつての彼がこれを読まないか………という下心を隠しつつ、この原稿を書いている。